

伝統を紡ぐ スペシャリストたち

長い歴史の中で熟成された伝統文化は、人との絆・地域との絆を繋ぎ、健やかな暮らしの基盤を育んできた。伝統の継承に使命感を持ち、年を重ねても第一線で活躍するスペシャリストから、元気の秘訣を伺う。

浜松風の技術を後世に伝え、絶やさないことが使命

毎年5月に開催される浜松まつり。中田島の凧揚げ会場には町ごとの大凧が天高く舞い、互いの糸を切りあう熱戦が行われる。まつりの主役・浜松凧を作る伊藤さんは、約140年続く伊藤家の凧作りを継承する職人。20代

の頃から家業を手伝い、凧作りのほか、蒔絵製造、かご盛り販売など、地元で根付くよろずやのような商売を行ってきた。「1月〜4月中旬頃までは、凧作りの繁忙期。すべて手作業で時間がかかるため、家族総出で制作してい

ます。浜松凧は1点ものの工芸品。美しい仕上がりにこだわっています。伊藤家の凧はすべて手作り。骨組みの竹を採取することからはじまるそう。いくつもの工程を経て凧が完成します。この伝統を守り後世に繋いでいくことで地域の役に立ちたいですね。そんな使命感を持つことが、元気でいられる秘訣かもしれません。また、伊藤さんは浜松まつりの組織委員会として運営にも携わる。ほか、地域や学校、趣味の場などでも責任のあるポジションを引き受けている。「さまざまな業界の人たちと触れ合う機会を持つこと、社会で自分の役割があること。そして、その合間に楽しめる趣味を持つことが、生きる喜びに繋がっているんです」。

浜松凧



伊藤安男さん (63歳)

各工程で神経を使う凧作り。余暇を利用して、趣味のクラシック音楽鑑賞でリラックスする時間を作っている。そう。浜松オーデオクラブの副会長も務めるほど、オーディオにも造詣が深い伊藤さん。

元気のヒケツ

趣味・楽しみを持つ
多くの人と関わる
体重維持。毎日体重を
量り、22時以降は
食べない!

「楽しさ、健康、そして人と関わる。趣味、楽しみを持つことが、元気でいられる秘訣かもしれません。また、伊藤さんは浜松まつりの組織委員会として運営にも携わる。ほか、地域や学校、趣味の場などでも責任のあるポジションを引き受けている。「さまざまな業界の人たちと触れ合う機会を持つこと、社会で自分の役割があること。そして、その合間に楽しめる趣味を持つことが、生きる喜びに繋がっているんです」。

浜松北部・天竜の山で採取した淡竹を使い、小骨作りと骨組。その後、紙貼り、絵描き、ろう引き、色付け、親骨付け、糸目付けの工程を経て完成する。手作業でしか作れない工芸品だ。

伊藤さん家の凧工房
浜松市中区天神町5-12
☎053-463-1572
<http://www.ito-san.jp/>

地域の絆が結ばれる 浜松っ子の熱い3日間

ゴールデンウィークの3日間に開催される浜松まつりは、450年以上もの歴史を誇る日本有数のおまつり。特徴は、東京の天下祭りや京都の祇園祭とは異なり、神社仏閣の祭礼とは関係のない「市民まつり」であること。子どもの誕生を祝う「初凧」の伝統を受け継ぎ、昼は174か町が参加しての勇壮な「凧揚げ合戦」、夜は83か町が夜の街を華麗に彩る「御殿屋台の引き回し」を行う。浜松まつりは、今、失われつつある地域コミュニティの確立と継承を守る役割も担う。町民たちは、この3日間を成功させるために、話し合い、助け合い、1年かけて準備を重ねる。まつりを通じて地域の人々との関わり、家族との繋がりを深め、地域愛を育んでいく。まつりを介した地域コミュニティのカタチは、住む人への豊かさをもたらしてくれ、生きる力を与えてくれているのかもしれない。

浜松まつり 5/3(火)、4(水)、5(木)開催!
凧揚げ合戦・中田島凧揚げ会場 御殿屋台の引き回し...市中心部
<http://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/>

愛する布・遠州縞を通じて、ボランティア活動に励む

県の技術職員として繊維製品開発に長年携わってきた小杉さん。60歳の定年退職後、浜松の伝統織物・遠州縞の普及活動を行う「遠州縞プロジェクト」を仲間と立ち上げた。遠州縞との出会いは約40年前。生地問屋の倉庫に積み上げられた反物を見て、大胆な色使いとデザインに魅了された。衝撃を受けたという。「一目で好きになりましたね。しかし、和装が減っていく中で、浜松の織物業も縮小していき、市民の認知度も低くなってしまいました。こんな素敵な織物をなくしたくないと思っただけです。定年後、遠州縞をなくさないためのボランティア活動をはじめた小杉さん。定年までの人生で、繊維業界や地域の人た

ちには本当にお世話になりました。だから、この先10年はボランティアに励み、恩返しをしようと思いました」。そのひとつが遠州縞プロジェクト。遠州縞に関わる人を繋ぎ、仲間を増やしながらい県内外で地道にアピールし、市民権を得るまでになった。「はぎれを使ってサンプル品を作ったりと、創作活動は息抜きでありハリハリのようなもの。好きなことが活動に活かせるのは幸せなこと」と語る小杉さん。活動をはじめて10年。まだまだボランティアは続けていくという。「面倒だと思わずに、地域の役割もできる範囲で引き受けたい」。人の役に立つ活動のすべてが、元気の源になっているように。

遠州縞プロジェクト

【えんしゅうじま】

遠州縞(商品名:遠州綿織)とは江戸時代から織り始められた遠州縞は、浜松織維デザインのルーツと呼ばれる織物。明治の頃には人々の生活着として用いられていた。日本の四季から生まれた温かみのある「日本色」とやわらかな質感、素朴な風合いが特徴で、着物から雑貨までさまざまな製品が新たに生み出され、現代に蘇っている。2007年グッドデザイン賞おおか大賞(県知事賞)受賞、2007はままつりビジネスコンテスト最優秀賞を受賞。
■遠州縞プロジェクト <http://www.enshujima-p.net/>



西、ヤマモモなどの草花や植物を使い染めた糸を、糸車で巻いていく作業。丁寧な下ごしらえの後、手織機で織りあげていく。

美しい絹織物を継承する ただひとりの職人

「トントン」「カタン」。工房に手織機のリズムが響き、美しい絹の糸が織られていく。織物業を営む「あかね屋」の初代、平松実氏が昭和4年に創作したざざんざ織りは、静岡県無形文化財に指定された伝統工芸品。現在、工房を切り盛りするのが、二代目・哲司氏の奥様・久子さんだ。「昭和33年に嫁ぎ、手ほどきを受けてから50余年。二代目が他界した後、この伝統を絶やしてはいけないと思い、制作を続けています」。技法は継承しながら、時代に合わせた新たな織りのデザインや製品を生み出すことが大切だという久子さん。あかね屋には、古典的な柄から現代的なエッセンスを加えた色使いのものまで、多彩な製品が並び、着物帯やネクタイ、ストール、名刺ケース...

元気のヒケツ

仕事を続けていること
買い物は歩いて出掛ける
旬の食材を食べること



平松久子さん (83歳)

「ざざんざ織りを知っていたために、東京のデパートやイベントへ出展し、私自身が店頭立つこともあります。職人なので営業は苦手なんですけどね(笑)。元気なうちは制作を続けたい、と願う平松さん。健康の秘訣は、仕事を続けること、歩く生活をする。機会があればお琴のお稽古をやってみよう。と、まだまだ意欲は尽きないようだ。

ざざんざ織

元気のヒケツ

忙しんでいること
先のことをクヨクヨ考えない
損得で考えず
骨惜しみなく働く



小杉恵主世さん (70歳)

地域のイベントへの出展のほか、地元の学校へ出向いての体験講座も行い、遠州縞を未来へつなげる活動をしている。



遠州綿織 はんかち
使うほど心地よいはんかち。色柄は30パターン以上も。各540円。

販売:ぬくもり工房
浜松市浜北区染地台3-12-15
TEL:053-545-6391
<http://nukumorikoubou.com/>

長財布 21,600円
折財布 19,440円
名刺ケース 各7,344円

ざざんざ織の糸は、玉糸いう2頭の蚕が共同で作った繭から取る糸と普通の糸から作るため、糸そのものに変化がある。ムラがざざんざ織の持ち味となっている。使うほどに増す自然の艶が魅力。

あかね屋
浜松市中区中島2-15-1 ☎053-461-1594
<http://homepage2.nifty.com/zazanza/>